

「ダンス作品の存在論と因果的つながり 唯名論の視点から」

児玉北斗
芸術文化観光専門職大学

本発表では、これまでダンス作品の存在論において等閑視されてきた理論的立場である唯名論がいくつかの点、特に作品の時間的柔軟性や直接的伝承の重要性を論じることができるがゆえ、有力な説となりえることを提示する。

芸術作品の存在論はその同一性を形而上学的に考察する抽象度の高い議論であると同時に、実践をめぐる諸問題に合理的説明を与える美学の重要な研究テーマだが、その中でもダンス作品は特殊な位置づけにある。音楽や演劇のような記号体系が一般的に普及していないダンスにおいては環境やキャストの変更のみならず、公演期間中にも振付家によって修正・改訂が行われ続けることが珍しくない。そのためアーカイブや再演、著作権といった作品の同一性が問われる局面で様々な不一致を抱えてしまい、理論的にも統一的な見解に至ることが難しいのである。Davies(2021)は現代の複数的な芸術作品の存在論において議論の中心となっている問題として反復可能性や創作可能性、様相的柔軟性などを挙げているが、それらのうち上記を鑑みてダンス作品にとって特に重要と考えられるのは時間的柔軟性であろう。作品の性質をリジッドなものとして把握するのではなく経時的に変化することを説明する理論でなければダンス作品の存在様態とそぐわないものになってしまうのだ。

ダンス作品の存在論はこれまで実在論的な「タイプ説」の検討を主軸として展開されてきたが、この説はダンス作品の中に動きを始めとしてその同一性を担保する性質を特定することで、抽象物(普遍者や種)としての作品タイプがそれらの性質を具体物としての上演に付与すると考える。しかしタイプ説は上演芸術の反復可能性を直観的に説明するために有力とされる一方、抽象物としてのタイプを時間的に柔軟な対象と論じるには理論的にかなりのコストを伴うがゆえ、ダンス作品に適用するには説得力を欠いてしまう。

本発表ではこの問題を乗り越えるため、ダンス作品を上演とは別種の普遍的抽象物というカテゴリーに押し上げることなく説明する唯名論という立場に立つ。この説のあるヴァージョンを採用すると、ダンス作品は彫刻や絵画と同じく具体物のカテゴリーに属すと認められ、上演と作品の関係を部分と全体関係として捉えることができるため、各上演間の差異を作品の段階とみなすこ

とが可能であり、時間的柔軟性の問題を解決できるだけでなく、創作され、変化を経て消失するという一般的な見解に即した形でダンス作品という存在を説明できる。また唯名論は通時的に共通する性質を確定しないがゆえに時間的柔軟性を許容できる反面、各上演間の類似性がいかにしてもたらされるかについての説明が必要となる。そこで重要となるのが実践の現場における一連の因果的つながりであり、先行研究ではクリプキ(1972)らが提示した「指示の因果説」を用いた説明がなされているが、実践的共同体における歴史的な連続性が指示の反復を可能にし、ひとつつながりのモノとして部分を全体に統合するというこの説は、ダンス作品の特徴を合理的に説明できる。

Pouillaude(2009)が論じるように「動きの芸術」であるダンスの現場では直接的伝承が依然重視されており、楽譜や脚本の様な明確な「起源」としての舞踊譜が存在しないケースが一般的なため、作品は固定された構造を欠いたまま実践における反復と社会的プロセスによって耐久的なものとなる。起源を物理的に参照することが不可能であるがゆえに、指示の歴史的連続性を維持するには、目的を持った実践の共同体が強い因果的つながりをもってプロセスを継続させる必要がある。ダンスにおいて一般的な、反復的リハーサルを通してダンサーの身体が習慣づけられることで徐々に作品が構築され、上演され、そして新たな演者へと直接的に伝承されていくというプロセスは旧来的な慣習の産物と思われがちであるが、唯名論の立場から見ればそれは形而上学的に要請されるものであり、実践的共同体の維持する因果的つながりが時間的柔軟性を持った作品という存在を可能とするのだ。

またこの説はダンス作品のアーカイブという問題に対しても重要な帰結をもたらす。タイプ説では上演の構造を詳細に記録し分析することが作品の同一性条件を探求するために重要な意味をもつが、唯名論の視点に立てばそれは作品の一部としての上演の記録であるため、常に変化の可能性に晒されていることになる。重要なのは構造の把握よりむしろプロセスの連続性をいかに維持するかという点であり、直接的な伝承を通じて変化を許容しつつ上演の可能性を保持していくということが作品アーカイブという観点で擁護される。この様に説明される場合、映像や舞踊譜は作品の同一性を必ずしも固定的に担保するものではなく、未来へ向け因果的つながりの中継し上演の可能性をつなぎとめる媒介者としての役割を担っているのであり、この点を考慮したダンス作品のアーカイブ実践が必要となるだろう。(本研究は JSPS 科研費 JP22K00147 の助成を受けたものです。)